

第一六号に寄せて

吉見 孝夫

第一六号をお届けします。

先日小誌のウェブサイトを立ち上げました。まだ準備段階ですが、まずは小誌に載った文章を順次アップロードする予定です。皆様からの情報やご教示、調査過程での疑問なども載せようかなとも考えています。お暇な折りにのぞいていただければ幸いです。URLは左記のとおりです。

<https://aesop-shiry.github.io/>

前号発行後も、何人かの方々から御著書や御論文の抜刷等をお送りいただきました。感謝申しあげます。またいくつか誤りや、情報をお教えいただきました。

中務哲郎氏から前号一三ページ上段の Emma Willard のファーストネームは Emma の誤記だとのご指摘を受けました。小誌を発送して二日か三日後です。英語圏からの留学生に訊いたことがあります。「英語には climb とか island とか発音どおりでない綴りがあるから、あなた方でも誤ることがあるでしょう」と。答えは「そういうのは間違えないが、同じ文字が重なる場合によくミスする」とのことでした。確かに英語には address だとか aggressive とか同一文字が続くケースが多い。こういう

時に一つだけにしたたり、逆に一文字でいいところを二文字続けてしまったりするようです。とはいえ、三文字続ける間抜けはいないでしょう。ご教示に感謝申しあげます。

前号でイソップにまつわる回文を取り上げたところ、中務氏から、こんなもあると二つほど話題を提供していただきました。イソップとは何の関係もありませんが、スピンオフとして皆様にも供します。

一つは次のものです。回文ではありませんが、読みようによって、ラブレターが三行半に変わるというものです。

幸せになりたいの。

嫌よ、貴方と別々に
なんて：そんなの私
じゃないから。一生
私の愛する人は貴方
だから、おねがい。

これはテレビで取り上げられたこともあるようですので、ご存じの方もありません。嫌よ」までを検索エンジンに入力すれば正解もわかると思いますので、こ

こでの謎解きは控えます。

もうひとつは次の一行で始まる長い英詩です。

Today was the absolute worst day ever

前のと同工です。これも検索エンジンにこの一行を入れれば全文が出てくるはずです。これをご存じの方はごく僅かでしょう。

毎回興味深い情報を伝えてくださる山西正子氏からは前号についてもまた話題をいただきました。山西氏の目白大学での同僚に梅津彰人氏がいらつしやいました。筑波大学でも教壇に立った国語教育の専門家で、先年お亡くなりになりました。皆様の中にも面識がおありの方もいらつしやることと思います。前号六〇ページに載った南洋庁の国語読本の編者梅津隼人は彰人氏の尊父です。当時の南洋庁には『山月記』の作者中島敦もいましたが、彼はこの教科書編集には携わっていないようです。

西村正身氏から『世界大百科事典』（平凡社）の初版（一九五八年）から一九七二年の版までの「満洲語」の項目に、満洲語による「北風と太陽」が日本語訳付きで載っていると御教示いただきました。イソップに関心をお持ちでも気付いた方は多分いらつしやらないのではないのでしょうか。これ以降の版にはありません。この項の執筆者は山本謙吾氏です。満洲語のイソップ寓話集が出典なのか、あるいは山本氏が満洲語に訳したのかは不明とのことです。もしおわかりの方がいらつしやればお知らせいただきたいと存じます。

西村氏からは更にもう一つ、市河三喜・高津春繁共編

（下巻は市河・服部四郎共編）『世界言語概説』（研究社）の上巻（一九五二年十一月）、下巻（一九五五年五月）にイソップ寓話が諸言語に訳されていることをお教えいただきました。かいつまんでどの寓話がどの言語に訳されているかだけを記しておきます。「北風と太陽」・フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語・英語・ドイツ語・オランダ語・スウェーデン語・デンマーク語・ノルウェー語・朝鮮語・トウングース語（オロクコ方言）・蒙古語・トルコ語・ハンガリー語・アイヌ語・ギリヤーク語・シナ語（北京語）・安南語。「肉を運ぶ犬」・トウングース語（満洲語文語）・シャム語。話者の多くない言語も含まれているのは貴重だと思います。といっても私にはこれらを活かす手立てがありません。どなたかポリグロットの方に分析、考察をお願いいたします。

福沢諭吉に『経済小言』（一八八一年九月）という著書があります。書名は「ケイザイショウゲン」と読むようですが、「小言」には「ことごと」の意も込めているのでしょうか。その中で福沢は、士族を脳・腕に、百姓町人を胃の腑に喩えています。身体の部位を比喻に利用する点でイソップの「胃袋と足」と共通しているのです。その改変かと一瞬思いましたが、どうやら江戸の心学者が似たような譬えをしていますので、そちらの影響のようです。

福沢といえば、一万円紙幣の顔が渋沢栄一に変わりました。福沢はイソップ寓話を一三話含む『童蒙教草』の

訳者として、イソップの受容に関係しています。新たな顔となった渋沢栄一の関わりを調べましたが無駄でした。ただ渋沢は、明治におけるイソップ普及の最大の功労者渡部温とは関係があります。共に東京瓦斯、横浜船渠などの企業の経営に参画し、東京製綱では会長が渋沢、社長が渡部といった仲です。五千円札の津田梅子もイソップとは関係なさそうですが、今号に載せた拙稿「*Bibliography of Japanese Empire* (『大日本書史』) が言及するイソップ物語」には梅子の父津田仙が登場いたします。千円札の北里柴三郎とイソップとの繋がりは皆目見つかりません。

津田仙の名が出る拙稿を成すに当たっては盲教育の世界を垣間見ました。その故に認識を改めることができた点もあります。例えば、国定教科書。それに載るイソップ寓話は、学齢にある者ならば当然だれでもが知っていると思っていました。しかし障害児教育の場では国定教科書がそのまま使われたわけではありません。私の視界には、障害児のような少数者が入っていないかったことを素直に白状しなければなりません。訪問した筑波大学附属視覚特別支援学校資料室で見せていただいたヘレンケラー自筆の書簡も印象に残っています。特別な道具を使っているように見えます。

最近のバックナンバーでは主に明治期の文献を扱いました。明治の四〇年余の間は、文献の形態・文字・文体・語彙が急激に変化した期間でもありました。和装で木版の『通俗伊蘇普物語』(明治六年)と、洋装で活字の

『イソップお伽噺』(明治四四年)とを比べてみます。日本語を知らない者ならば、この二本が同じ言語で書かれていることを疑うかもしれません。前者の原本 Thomas James Asop's Fables の文字は、アルファベットを覚えただけの日本の小学生でもわかります(田は見たことないなと思うでしょうが)。一方『通俗伊蘇普物語』は、特別な訓練を受けた者でなければ、現代人は一行も読めないはずです。用語も変わりました。今号では拙稿でその変遷の例として、「日輪」から「太陽」への移り変わりを取りあげました。「日輪」という単語を耳にしたのは、東京六大学野球のファンだった父に連れられて行った神宮球場の早稲田応援席から聞こえてきた「コーンペキノソーラー、アーオグニチリーン」が多分最初です。

「うつりゆくこそことばなれ」(コセリウ著書の、かめいたかし・田中克彦訳本のタイトル。ただし田中単独訳の岩波文庫版では『言語変化という問題』とは蓋し至言というべきでしょう。ことばを研究対象とするのであれば、その「うつりゆき」にこそ学的関心を抱くべきで、新語や新しい表現を無条件に排除すべきではないでしょう。しかし一方で一人の日本語話者として、誤りとされていた語法の広がり違和感を覚えるのを抑えることもできません。他人の前では自分の親を「チチ・ハハ」と言うのだと留学生に教えてもあまり守ってもらえませんが、それもそのはずで、周りの日本人学生は勿論のこと、テレビでもネットでも、タレントもアスリートもそ

んな言葉は使わないのですから。「吉見センセイの日本語は二一世紀用にアップデイトされていない」と思われているようです。そのとおりで否定はしません。先日、いずれも二十代の、角野隼斗というピアニスト、上白石萌音という俳優・歌手が「ハハ」「ソボ」と口にするのを聞いて、古くさいというよりも新鮮な感じを受けました。

ひょんなところでイソップに出会いました。江戸末期から明治の古文書を愛好家の方々と読んでいます。そのテキストの一つに青木喜三郎という明治時代の函館の事業家の日記があります。これに堀三友・秋野繁吉の『伊蘇普実伝』が出てきて驚きました。青木はこれを購入しているのです。青木はクリスチャンで、同じクリスチャンの五十嵐喜広の発行する雑誌『救済新報』を購読していました。その救済新報社から『伊蘇普実伝』というのが出版されたのを知って買ってみようと思ったようで、格別イソップに関心を抱いたわけではなさそうです。代金を送ったのが明治三二年三月一七日。同年二月一日刊行の直後ということになります。読後の感想を知りたいところですが、それは書いてありません。なお、明治の文書なら読みやすいだろうと思われるかもしれませんが、逆です。自己流の字の崩し方で、しかも他人が読むことを想定していない日記ですから、難読極まりないものです。

今号では、イソップの受容に関わった人々をリストアップしました。三百人強に及びます。そのうち明らかに

日本人女性であるのは唯一人、下田歌子だけです。それも編集した教科書や読み物にイソップ寓話を一つ載せただけの関わりです。こういう状況は明治のイソップ理解に偏りをもたらししていないか、女性がもっと関与していたらばイソップ寓話に対する見方も変わっていたかとも想像します。しかし一方、家庭において母親が子どもに読み聞かせる形で関わったケースも多いでしょう。単純に、イソップ受容に女性の影響は与えなかったとも言いきれないかもしれません。

この一年の間にも、いくつか関連図書が刊行されたようです。原澤隆三郎編訳『ラテン語原典訳付イソポ物語―『エソポのハブラス』』（東京図書出版、二〇二四年三月九日）は、ラテン語とその訳、『エソポのハブラス』を並べて対照させています。つい最近には、内田慶市編著『漢訳イソップ集拾遺』（遊文舎、二〇二五年三月一日）が刊行されました。内田氏の『漢訳イソップ集』（ユニウス、二〇一四年二月二八日）に続くものです。漢訳以外にハングルによる最初のイソップ寓話集『ウソンソリ』が掲載されています。私にとつては、未知の資料ばかりで氏の博搜には驚き入ります。

本号をもって休刊と致します。廃刊ではありません。いまのところ次号を刊行する予定がないという意味です。書きたいことはあるのですが、一冊に達するほどのボリュームにはなりません。書いてもいいよとおっしゃる方は是非ご連絡いただきたいと存じます。

小誌は、もともとイソップ寓話から日本語に組み入れ

られた次のような語・語句・諺・比喩表現の受容過程を調べてみようと思ひ立つたのが始まりです（A 15等はB.E.Perryの*Aesopica*の番号です）。

・ 負け惜しみの比喩としての「すっぱい葡萄」（A 15）

・ 「」はロドスだ」（A 33）

・ 峻厳と寛容の比喩としての「北風」「太陽」（A 46）

・ 勤勉と怠惰の比喩としての「アリ」「キリギリス」（A 112・373）

・ 「狼少年」（A 210）

・ 慢心と努力の比喩としての「ウサギ」「カメ」（A 226）

・ 「大山鳴動鼠一匹」（A 520）

・ 日和見主義の比喩としての「コウモリ」（A 566）

・ 「猫の首に鈴を付ける」（A 613）

さて作業に取りかかってみると、イソップ寓話集以外、どのような資料にイソップ寓話が載っているか皆目わからないのです。そこで自分で調べてみるしかないとあれやこれやの文献をあさりました。それだけで相当の時間や時間がかかり、なかなか論文を成すまでにたどりつきません。それなら考察やら分析は後回しにして、調査結果だけでも公表することと決めました。論文とは呼べないので雑誌には載せにくい、ならばいつそ自分で雑誌を作ってしまったおうと創刊を決しました。研究の土台となる資料発掘を主としますので『イソップ資料』と名付けました。かくのとおりの次第ですから、便宜上タイトルに「研究」を付けたものもありますが、小誌に載った文章

のほとんどは研究ではありません。謙遜や卑下ではなく、思いつきをあれこれとこね回しただけの研究まがいよりは永く読まれるだろうという程度の自負はあります。

あと数年は大学から研究費を受け取れる、それまでは続けようと決意しました。ところが大学を離れた身分になっても、書き尽くせません。今風にいうならば「イソップ沼」にはまってしまったのでしよう。到頭創刊から一四年後の今日まで、一六号に至りました。これまでにいただいた皆様からの叱咤・激励に支えられて継続することができました。心から感謝申しあげます。

創刊以来小誌の作成、製本を担ってくださったのは株式会社大弘社印刷です。代表の梅本成利氏は、企業経営者というよりも、絵を趣味とする、文化人と評するのが似つかわしい方です。氏及び社員の方々に、最初の読者として誤字や不備を指摘されたのも一度や二度ではありません。ここにお礼申しあげます。